

S P F 豚に期待するもの

本 田 英 三

SPF豚作出の目的は豚の生産性を甚しく阻害するSEP等の疾病群を排除して健康状態を維持しながら飼育することに依って優良品種の能力を最大限に発揮させようとするに依った。即ち予防や治療の困難な疾病の清浄化によって生産性を向上させ高収益を得るという生産第一主義で三十年間を走り続けて来たのである。最近ではSPF豚の母豚が10万頭近くになり総母豚数の9%を占めるようになってきている。当初の目標は10%に置いていたのであるから、SPF豚への変換が着実に進行したことになり先ず第一関門を突破したことになる。

一方1992年2月の畜産統計に依れば豚の飼養戸数は29900戸となり前年比17%も減少している。十年後には7000戸程度になるとも言われている。また農水省の予測では豚の飼養頭数は昭和62年度から平成12年度までの14年間で僅に100万頭増の1276万頭となっている。これは後継者不足や環境問題等によるものではあるが、ますます大規模飼育者による規模拡大が進行し企業化しているという証左でもある。

経営の大型化は必然的に防疫疾病対策が要求されるが、この面からするとSPF豚は集団変換に最も適したものである。SPF豚の強健性については問題ないが徹底した衛生対策が前提であることは勿論である。現在欧米の豚の生産地帯で「PRRS」という新しい伝染病が流行している。オーエスキー病等次々と疾病が蔓延する度にSPF豚が認識され、それだけ依存度を深めることになる

から期待されるSPF豚は生産性収益性の何れもが高い水準を満たさねばならない。母豚の供給者はその責任が重大である。

価格面については牛肉が自由化され豚価に対する影響が心配されたが三年間は高率関税が賦課されて居り豚肉の輸入も差額関税制度によって保護されているので差迫った問題はないが、将来的には真剣に検討する必要がある。

SPF豚生産者にとって疎かに出来ない問題は豚肉の流通の問題である。生産物の市場性が重要なものになって来たにもかかわらずSPF豚肉の優位性はあまり強調されていない。消費者の求めている一つに安全性がある。薬剤の残留の恐れがなく特定の疾病のないSPF豚肉は他の畜肉に比較して格段の差がある。

SPF豚肉のブランドで流通することが少ないので無理はないが、米でも優良品種「ヒトメボレ」「ササニシキ」などの銘柄で流通しているのであるからSPF豚肉をもっと前面に押し出す必要があるのではないだろうか。生き残るためには消費者の嗜好に適したものの生産が望まれるがSPF豚は資質的にも十分それに応えるだけの能力があるのであるから、生産者自身ももっと川下の流通に積極的に関与しなければならない。そうでないとバラ色の未来はない。